

「JENESYS2.0」中国大学生訪日団第19陣
参加者の感想（抜粋）

○ 最も印象に残ったことは、まず日本における人と人との付き合い方だ。彼らは礼儀正しく、謙虚で注意深く、常に他人の気持ちを考える。表情には微笑みを絶やさず、見る者の気持ちをリラックスさせ、自ずと好感が生まれる。この点は、日本のサービス分野において特に顕著である。彼らはどんな時も小声で話し、他者の耳障りになることはない。サービスを受ける側は、まるでわが家に帰ったような快適さを感じるのである。

次に印象的だったのは、日本のさまざまな施設である。ごく普通のトイレから、街中の自動販売機、そして商店内の電気設備まで、そのすべてが、今自分は超先進国にいることをはっきりと意識させるものだった。ホストファミリーの家の各種家具や設備もまた然りで、中にはあまりにも先進的過ぎて使い方が分からないものさえあったが、要は、あらゆるものが最大限に人にやさしくつくられ、大多数の人の利益に全面的な配慮がなされているということである。

最後に、もう一点、日本人の次世代に対する教育方法について述べたい。これは中国人がよく考え、学ぶに値する点である。日本人の子供は、2、3歳ですでに独立している。それは、親がこの時点ですでに彼らと対等に接しており、子供が自由に成長できるように十分に配慮し、子供を発言権を持つ家族の一員としてみなしているからである。ホームステイの時、2歳の女の子も夕食の支度を手伝っていて、実践的な能力が高いと思った。これは中国ではめったにないことである。

言いたいことはたくさんあり過ぎて、ここにすべてを書くことは難しい。また日本を訪れる機会があることを望むと同時に、周りの人にも日本を訪れることを強く勧めたい。きっと、人生全体にいつまでも影響を及ぼすような体験を得ることができるに違いない。

○ 中学生の時から日本のドラマを観始めた私にとって、日本はずっと画面の中にある国だった。今回日本人の生活を身を以て体験することができて、たいへん感激している。

最も印象深かったこと：

東大寺の見学。バスが奈良の街中に入ると、とても穏やかな雰囲気が感じられた。大らかで素朴で、静かで落ち着いているというのが、この都市の第一印象である。奈良公園内にはそこかしこに野生の鹿が見られた。座っているもの、立っているもの、通りを闊歩しているもの、落ち着き払って観光客の与えるエサを食べているもの。彼らはごく自然に人と共存していて、まるで自分たちも人間の一人かと思っているかのようだった。そこには種の違いは存在せず、自然と一体になった調和のとれた共存があるばかりだった。

東大寺に足を踏み入れた瞬間、私は深い感動を覚えた。1,400年前に創建された寺院が、幾度も戦火の洗礼を経て、今もなお、奈良の地に建っている。押し寄せる観光客の群れも、その荘厳さを損なうことはなかった。私は多くの寺院を訪れたことがあるが、その中で東大寺は最も素朴で、最も大きな寺院である。その独特の重厚感に、訪れる者は思わず肅然と襟を正す気持ちにさせられる。

日本は先進国でありながら、一都市の1,300年前の様相を保つことに尽力している。これは中国ではほとんど想像できないことである。今回日本を訪れて、私が最も感動したのは、まさにこの現代と伝統の融合である。歴史を尊重してこそ、今を正しくとらえることができると思う。

帰国後に伝えたいこと：

日本は細部を非常に大切にしている国である。この点は私たちが学ぶに値する。制約は、時に原動力に換えることができるのだ。

○ 深刻なスモッグに悩まされている北京から来た学生として、私は、日本の土を踏んだその瞬間に、ここの新鮮な空気がいたく気に入ってしまった。その時、今回の訪問は、きっとすばらしいものになるという予感がした。

果たして、日本で体験した数々のことがらのすべてに、私は強く引き付けられ、感動した。一つの活動を体験するたび、また、一つの場所を見学するたびに、日本に対する理解がより深まっていった。最も印象に残ったのは、日本大学での学生交流と、明日香村でのホームステイ体験である。日本大学での交流の際に一番よく話をしたのは、大学1年生の女の子だった。てっきりファッションや芸能人等の若い女の子が興味を持つ話題を向けてくるかと思いきや、意外なことに、彼女は自分の悩みを話

し始めた。彼女は人生の方向を考えていて、もともと数学が得意であったが、今は中国語を勉強し始めたところである。小説家になる夢を持っていて、すでに 18,000 字余りを書き終えた…これらの話を聞いて、彼女より 4 歳年上の私は、とても恥ずかしくなってしまった。こういう人生に対する思考は、私たち中国の大学生は本当に学ぶべきところであると思う。

今、明日香村の優しいおばあさんと可愛い 2 人の孫たちのことを想うと、自然と目頭が熱くなってくる。1 泊という短い間であったが、おばあさんの家で受けた心遣いともてなしは、一生私の心に刻まれて消えはしないだろう。日本語の「一期一会」とはこういうことを指すのだろう。短時間の交流でも誠意を尽くし、その機会を大切にすることだ。

中国の人々は、おそらく戦争のために日本に対して誤解があると思う。日本語を専攻する国際関係学院の学生として、帰国後にすべきことは、日本人のお客に対するもてなしと温かい気持ちを皆に伝え、両国の関係改善のために自分なりの貢献をすることである。

○ 今回の活動で最も印象深かったことは、日本人の人生に対する考え方である。今回、明日香村で日本の普通の人々の暮らしを体験する機会に恵まれた。私を受け入れてくれた家庭の主人は、東京出身の女性だった。彼女は若い頃はフランスに留学し、カンヌでファッション関係の仕事をしていた。帰国してからは、ある団体と一緒に無人島を開発する仕事をしたり、映画の脚本を書いたりしたこともある。しかし、3 年前に彼女はそれまでに得たすべてのものをあっさり手放し、奈良県明日香村にやって来た。一心にみかん栽培に励み、研究に没頭した。みかんの薬としての価値を研究し、派生商品等を開発した。彼女の経歴を聞いて、私は強く揺り動かされ、そして気づかされた。人生において人が求めるものは、上辺の華々しさだけではないこと。心の安らかさをも追い求めるものであるということ。このような人生観は、私の心を強く打ち、あらためて自分の人生を見つめ直し、自分はいったい何を望んでいるのかを考えるきっかけとなった。

日本人のこのような明確で、静かな人生の追求を周りの人に伝えたい。もちろん、日本人の評判通りの親切さと礼儀正しさも伝えるつもりだ。JENESYS2.0 がこのような機会を与えてくれたことに心から感謝したい。

○ 日本人の親切さ、マナーの良さ、そしてこの国の先進的などが最も印象に残った。

ホームステイの際、受け入れ家庭のおばあさんは、私たちが留学を希望していることを知ると、すでに布団に入っていた私たちのところにあらためてやって来て、自分の次男の仕事はおそらく留学と関係があるから、私たちが推薦してあげたい、そうすれば日本についてもっとよく知ることができるからと話した。これはすでに主人の客人に対する気遣いの枠を越えて、人生の先輩からの後輩に対する心配りだと感じた。

京都外国語大学で講座を聴講した際、時間は短かったものの、日本語の深さや内に秘められた魅力を感じる事ができた。普段は学べなかつたり、間違っして認識したりしている日本語表現の多くについて、講座を聴いて認識を新たにした。また、NHK の講師による講座を聴講した際は、自分の表現方法について、また認識を新たにした。日本語の表現方法のみならず、中国語の表現方法においても、新たな認識を持つ事ができたと思う。言語による表現というのは、言語の種類には関係なく、自分の考えを相手に理解してもらうことが最終の目的である。日本大学の見学を通して、日本での大学生活に対する憧れがいっそう強まった。日本の学生と交流できたことも、留学の意志をさらに強固なものにした。

帰国後に伝えたいことは、日本に対する印象を少しずつ改めてほしいということだ。中日関係にはなおもわだかまりがあるが、それによって、両国の人々の交流が阻まれてはいけないと思う。私たちは、もっと深くお互いを理解し合い、相手を知るべきである。

○ 細部が成否を決める。日本の魅力は、その大部分が細部にある。例えば、書店では客が買った本にカバーをつけてくれ、本がより長持ちするように配慮している。

ごみは、置き場所を間違えた資源である。日本のごみ処理は、日本国内の限られた資源を活用するのに有効な方法である。日本では中古文化がとても盛んだが、これも資源の十分な活用を促している。愛がなくては、原動力は生まれない。日本のキャラクター文化はますます盛り上がりを見せている。キャラクター関連の各種イベントに注目することで、日本各地の住民は、ふるさとに対するアイデンティティを高めることができ、ふるさとの文化の発展を促すことにつながる。

お互いを尊重すること。日本のサービス業の従業員は、お客に親しみを込めた挨拶をし、お客も軽

く頭を下げてそれに答える。スーパーマーケットやショッピングセンターで、店員がなんとか商品を売ろうとしてお客にまとわりつくということもなかった。

○ 最も印象に残ったのは、まず一つ目に、日本のトイレである。ほとんどが洋式のものであった。もう一つは、日本の田舎の人々の暮らしである。

日本のトイレはとても清潔で、しかも、人の肌に触れる部分は、加熱して暖かくなっている。よく見ると、さらに「流水」「音楽開始」等の機能表示があり、たいへん人にやさしい設計になっている。また、トイレのペーパーは基本的に水溶性の物が使われ、便器に流してもトイレを詰まらせることはない。使用後のペーパーを流すことができれば、トイレ内においを残すこともない。私はいろいろな所に行ったことがあるが、日本のトイレが一番清潔な気がする。その背後には、技術力の支えがあると思う。

明日香村でのホームステイ体験は、本当にすばらしかった。ここは本当に農村なのだろうか？明日香村と私の故郷である安陽は、よく似ている。安陽は殷の時代の古都で、華夏（中国）文化の発祥の地であるが、きちんとした保護が行われず、今日の発展も楽観できない状態だ。一方、明日香村では、建築物に規制をかけ、元の状態を守ろうとしている。この点は、私たちは本当に学ぶ必要があると思う。ここの人々の暮らしはゆったりとしていて、下はまだほんの小さな子供から上は7、80代のお年寄りまで、誰もが自分なりのライフスタイルを持っている。彼らはご飯の支度を手伝ったり、何か手仕事をやったりしている。毎日を心地よく、楽しく過ごしているのだ。村民は自分のふるさとを誇りに思い、ふるさとを守るために自らも力になりたいと思っている。

帰国後は、自分が見たもの、身を以て感じたことのすべてを皆に伝えたい。周りのクラスメイトたちも日本を訪れて、この高度な文明を持つ国を体験してほしい。

○ 最も印象に残ったのは、京都府の文化財保護政策に関する講座である。紀元6-8世紀、日本は遣隋使と遣唐使を遣わし、中国の進んだ文化と技術を学んだ。しかし、現在の中国には1,000年以上の歴史を持つ木造建築群はほとんど残されておらず、これは悲しむべきことと言わざるを得ない。京都府の文化財保護政策の法令は明確であり、管理も適切に行われ、最古の建築物の本来の特色を最大限に残すことができている。

周りの人たちに伝えたいのは、日本人の中国に対する考え方や見解である。もちろん日本が衛生的であることや、ごみ処理技術、日本の進んだ科学技術や伝統文化の魅力も伝えたい。日本の万世一系の天皇の継承システムが、日本の伝統文化の発揚と継承につながったのだろうか。

○ 今回の訪問を通して、いくつかの場面が、印象強く残っている。

1. 明日香村で私たちを受け入れてくれた夫妻は、明日香村の歴史に精通しており、説明の際はまるで家宝を数え上げるようにすらすらと語り、自信に満ちていた。このことについて私は特に多くのことを考えさせられた。自らの民族の文化を愛する民族は、必ずや強大な民族である。特にお母さんは、万葉集や百人一首等の古典詩歌に深い理解を持っている。同時に、彼女は大自然をこよなく愛し、ほとんどすべての植物の名前を言えるほどだ。このような自らの民族の文化に対する愛と大自然の万物を大切に思う心に、深く感じるものがあった。
2. 法政大学で交流した福祉学部の学生が、日本の公務員について説明してくれたのが印象に残った。彼はこう語った。「日本では、公務員というのは人を助けたり、支援したりする存在だ。社会福祉学部の学生は、卒業後は社会福祉の仕事に就くので、皆が公務員のようなものだ」
3. 最初からずっと私たちと同行してくれた日中友好会館の職員は、白髪交じりの年配の男性だが、かくしゃくとして、元気旺盛で、中国で目にする老人とは全く違っている。彼は仕事のために毎日新幹線に数時間乗り自宅と職場の間を往復しているそうだ。このように生活を愛し、楽しむ姿勢には敬服させられる。
4. 父は脚が不自由であることから、私は日本の障害者に関心を持っていた。しかし、地下鉄やショッピングセンター、路上においても彼らは健常者と変わらない心の状態で、忙しく充実した生活を送っており、コンプレックスを持ったり、落胆したりしている様子は微塵も見受けられなかった。

帰国後は、日本で自分の目を見たことや自ら体験したことを皆に紹介するとともに、日本は美しく清潔で、マナーのある国だと伝えたい。

○ 「幼少期から教えよう」は、単なるスローガンであってはならない”

日本滞在の数日間、日本側の温かいもてなしを受け、本当に感謝している。今回の訪日のために尽力くださった日本と中国の方々にお礼を言いたい。皆さんのおかげで一生のうちで一番忘れがたい8日間を過ごさせてもらったことに感謝する。

この数日間で最も心を動かされたこと、最も印象深かったことをここで述べたい。私たちは日本で塵一つない街や美しい山河の景色を目にし、清浄な空気を胸に吸い込んだ。これらの快適さの背後にあるものとして、日本では国民に対して幼少期から教育を開始していることに着目すべきである。資源が不足していることや、ごみの分別と資源リサイクルの大切さを幼いうちから理解する。学校の授業の一環として、小学生がごみ処理場に見学に来ているのを目にした。そして、政府もかなりの力を傾けて、学生の見学用の設備や資料を整えている。つまりこれは、下から上まで、政府から一般市民までの国民全体の一貫した行動なのだ。自分の周りの環境を守り、自分の国を大切にすることである。

中国ではよく「幼少期から教えよう」と言う。しかし、その多くは、表面的で形式的なキャンペーン活動に用いられている。ある種の行いを改めたり、ある種の習慣を国民の間に養ったりすることは難しいと認めざるを得ない。しかし、私たちには努力すべき方向がある以上、上辺だけの取り組みに止まったり、進歩のないままでいたりするわけにはいかない。「幼少期から教える」ためには、国民全体の決意が必要であるし、さらには政府の的確な措置が必要になる。「幼少期から教える」ことによって、真の変化がもたらされることを望むと同時に、山青く水清い未来を期待したい。

○ 今回の8日間の訪日を通じて、中日両国はもっとお互いの理解を深めなければならないと感じた。中日両国は一衣帯水の隣国であり、いずれも世界における経済大国である。両国の安定と繁栄は、世界の平和と発展に重要な役割を果たすものである。今回の訪問で、商品経済とサービス産業が高度に発展し、環境保全対策と公共施設が整備され、科学技術が発達した日本を目の当たりにした。

新江東清掃工場の見学では、日本の先端技術に深く心を動かされた。同時に、日本人のごみ分別の意識についても私たちが学び、参考にすべき点が大いにあると思う。日本に来る前には、ごみ焼却場が広い緑地に囲まれ、東京湾のさざ波がきらきらと輝き、ゆっくりと流れる様子など、私には想像もつかなかっただろう。もちろん現在の日本の環境がこのように優れているのは、先端技術によるのみならず、さらには政府の支援や政策、そして全国民が力を合わせて保全に取り組んだ結果である。現在、中国では環境問題がすでに差し迫った状態にある。帰国後は、日本の環境面の取り組みに関して感銘を受けたことや見聞したことを周りの友人や家族に必ず伝えたい。

日本人の仕事に対して一生懸命に取り組む姿勢は、今回最も深く感銘を受けた点である。仕事に真剣に取り組む姿勢には、一人の人間の人生や他者、時間、仕事に対する尊重が現れている。日本人はまさに自己と他者との関係を重視し、大切にすることがゆえに、自身の仕事を全うしようと一生懸命になるのだと思う。そして同時に、相手の気持ちを十分に思いやり、最大限に他者を尊重すれば、自分にも良い報いが帰ってくるものだ。日本人のこのような仕事に向き合う精神や人と人との関係を重んじる姿勢は、日本の商品の人にやさしいデザインや、サービス業の高度な発達、公共施設の便利さからも、その一端をうかがい知ることができる。

以上、私が最も感銘を受け、家族や友人に伝えたいと思う体験と感想である。

○ 中国大学生訪問団というよりは、中国大学生交流団という方がふさわしいだろう。私たちは一方的に中国からはるばる日本まで来たわけだが、日本の大学生や村民、一般市民との会話は相互作用的なものであったので、中国人は実地で日本人を感じる事ができたし、日本人も同時に、二言三言の会話やあるいは膝を交えてじっくり語り合うことを通じて、一衣帯水の国の人々はいったいどのような人たちなのか、知る機会を得たと思う。私自身は、この8日間で前者の目標を達成する過程で、自分のささやかな努力を以て、日本人に、彼らがよく知っている、またはよくは知らない中国人の善意を感じてもらいたいと思っていた。

この数日間、一番多く口にした言葉は、「すみません」だった。一番頻繁に行ったことは、おじぎである。それに対して、最も多く耳にした言葉は、やはり「すみません」で、一番よく目にした行為は、おじぎだった。日本文化は恥の文化を主流とし、最大の自由空間の中で、人に迷惑をかけないことを基準として行動することで、尊重を示すのが常である。そしてこのバランスが壊されると、原因が自分にあっても、相手にあっても、まずは一歩引いておびることで、自由と尊重を引き続き維持しようとするのである。決してサービス業に限ったことではなく、街中どこでもこのようなことが起こ

っているのだ。これが即ち日本人の尊敬すべき点である。もう一点は、日本人の真面目さである。今日はあいにく本を1冊ショッピングセンターに忘れてしまったのだが、添乗員の人は関係者に連絡を取るために走り回ってくれて、私はとても感激した。また、こんなこともあった。数名のお年寄りが朝食を済ませたところに行き合った。そのうちの一人はすっかり腰が曲がっていた。そこに年配の従業員が通りかかり、両者は簡単かつ生真面目におじぎを交わした。年をとっていても、謙虚さが身に付き、日常の細部の中で誠意として表されている。このことは、私にとって一生の収穫である。

天理大学を訪問した際、突然鳴り出した雅楽の音に、全身に鳥肌が立った。なぜか、中国の春秋時代の礼楽を惜しむ気持ちになった。中国の礼楽も継承されていることは知っている。でも、日本のように、楽器を若者の手に渡すことができればさらに良かった。日本の学生に雅楽の楽器を教えてもらううち、少しずつ雑談を交わし始めた。時間は短かったが、お互いに楽しい思い出になった。まったく見ず知らずの者同士から、「この人は面白い日本人だ」「この中国人は興味深い」と思うまでになったのだ。ラッキーだった。最後に中日の学生が合同で雅楽の演奏をした時、正面でカメラを構えている人たちが、皆嬉しそうで、しかも恭しい表情を浮かべているのが私には感じられた。

この7日間でたくさんの経験をした。明日は帰国の途に着く。明日香村のおばあちゃんが別れ際に私に言った「さびしいよ」のせいか、夜9時に秋葉原で道に迷い、道行く人たちに相次いで道を教えてもらったせいか、はたまた天理大学の学生が最後に私に言った「声優になるね」のせいか、眠るのが惜しく、また眠れそうにもない。おばあちゃんとは、来年桜が満開になる頃、また会いに行く約束した。その前に、私は周りの人たちに、日本で出会った人たちが私にくれた小さな手助けと大きな感動を伝えるのだ。この1週間に感謝。

○ まず、日本の都市建設が、私にとって印象深かった。以前は、日本は高度に発達しているので、発展の「表層的な」象徴として、都市の至るところに高層建築が建ち並ぶ、「コンクリートの森」のような状態ではないかと思っていた。実際に来てみると、必ずしもそうではないことに気がついた。高層建築は想像したほど都市の中に多く存在せず、一部の地域では高さ制限を実施して、都市に広々とした空間を与え、空気の流れをよりスムーズにしている。一方中国では、不動産はすでに「バブル化」の傾向を呈している。都市には高層建築が所狭しと建てられ、「風の通り道」は塞がれて、中国で日まじりに深刻化しているスモッグ現象の成因の一つにもなっている。

物質面でも、日本は非常に発達している。中国と少し違うのは、本当の意味での「供給過剰」であるという点だ。いわゆる「供給過剰」とは、大量の粗悪商品が存在し、その大部分は必要とされないために、実際は商品選択の範囲が狭い、という状態を指すのではない。本当の「供給過剰」とは、同程度に高い競争力を有する商品が大量に存在するということを指す。

文化の面では、日本は西洋の進んだ文化を大量に吸収すると同時に、自らの文化もしっかりと守った。一部の伝統的な習慣はよく守られ、継承されている。この点、中国は反省し、学ぶ必要があると思う。私たちは時に西洋文化ばかりを崇め、先人たちの真髄を手放してしまうことがある。中国人の住宅の多くは西洋式で、自身の民族の特色は見られない。しかし日本では和風建築が多く、多くの住宅は木造である。部屋には畳が敷かれているが、エアコンや、先進的な照明、トイレ・バスルーム設備も同時に備えられている。全体としては、自国の文化と外来文化がうまく組み合わせられているのだ。民族の文化や特色のない国には、魅力がない。それは悲しむべきことでもある。

両国の関係については、長い間、中国人は、日本人は歴史を直視していない、しかも中国人の振る舞いや資質に対して一定の反感を持っている、と考えてきた。日本人は、中国は近代化があまり進んでおらず、人々の意識は遅れていて、融通がきかず、マナーや資質の面で向上が待たれる、と考えてきた。双方ともに大きな誤解があり、認識がずれていると思う。私個人について言えば、中国で教育を受け、マナーや礼儀をわきまえた青年に成長したと思う。日本の規則や制度、人々の考え方も十分適応可能であるし、一人一人が他者の立場になって考え、社会がスムーズに動いていく感覚は大好きだ。私が出会った日本人もみな友好的で親切だったし、いわゆる「偏見」を持っていなかった。交流はスムーズだった。中国には私のような青年がもっとたくさんいる。だから、両国の人々は必ずお互いに理解し合えると思う。中日両国は手を携えて前に進み、友好を保ちながら発展し、ともに新しい時代に踏み出して行けるに違いない。自分には、そう言える理由と、自信がある。

○ 今回、私は初めて外国に行く経験をした。自分が勉強したことを実践に移せる場所、日本に来られたことは本当に光栄だった。日本の地を踏んでから間もない頃は、未知ではあるけれど、少しだけ聞いたことがある物事のすべてに対して、注意深く接していたが、融け込むにつれて、日本の寛容性

が感じられるようになってきた。国際的な大都市である東京は、世界各地の観光客や文化をすべて受け入れながら、同時に、自らの伝統文化を守り通すとともに、発揚、継承してきた。この点に気がつき、とても感服した。また、日本人の高い自主性と独立の傾向も、印象に残った。公共の場において他者の個人的空間を尊重することも、いわゆる「公共道徳性」のマナーの現れであるとするのは、日本人独特の考え方である。大部分の中国人は、「一人で楽しむより大勢で楽しむ方がいい」という考え方であるかもしれない。だから、中国の公共の場では、このような静けさはなく、見知らぬ者同士でも少し挨拶を交わしたりさえする。しかし、これは別に日本人が「冷淡」であるのではない。奈良の街で、夜の人気の少ない通りで道を尋ねると、親切な日本人は根気強く教えてくれた。中には、携帯電話を出して経路を調べてくれる人もいた。このことは一見矛盾しているようでいて、「菊と刀」の民族的象徴のさらなる一つの裏付けになっているのである。

今回の訪問が私にもたらしたものは、思考である。どうしたら両国の国民の相互理解を深めることができるか、どうしたら両国の友情が深まるのか、そして、お互いに相手から何を学ぶことができるのか。これらの問題を携えて、明日は帰国の途に着く。あらゆる変化は、まず物事に対する認識と思考を源として始まるものだと思う。自分が見たもの、感じたことを祖国に持ち帰り、身の周りの人と共有することで、より多くの人に「最も熟知しながら見知らぬ人」—日本に関する疑問について考えてもらえるようにしたい。

○ 今回の訪問で一番心に残ったことは、ホームステイだ。初めにホームステイがあることを知った時、本当は少しおじけづいた。というのは、自分は日本語があまり上手ではないし、日本についての理解も乏しいからだ。それに、日本の家庭にたぶんあるだろう「ルール」について全く知らない。何か自分が間違ったことをしてしまっても、それを説明する術がないと心配していた。不安な気持ちでホストファミリーと対面した。最も嬉しかったことは、子供がいたことだ。きまり悪い場面が多々あっても救ってもらえると思った。彼らと接しているうちに気がついた。夫婦は、決して豊かではなく、大きな家や高級車もないけれど、夫婦に子供一人で一つの家族、本当に温かく、安らぎに満ちていた。彼らと話をしている時、彼らの前向きで真面目な姿勢や、飾りのない褒め言葉、謙遜しながらくれるアドバイスに、私の気持ちは温かくなった。だから、これが私の一番心に残ったことである。

帰国後、周囲に伝えようと思っていることは、日本人の考え方、日本の街には塵一つないこと、皆が信号を守ること、日本のそこかしこに謙虚さが満ち溢れていることだ。日本人の資質は、本当に高い境地に達していると思う。彼らが喜んで社会のルールを遵守しているからこそ、すべてのことが、このようにうまくいっているのである。チャンスを狙ってうまく立ちまわったり、棚からぼた餅を望んだりする人はいない。これはおそらく中国人に最も欠けている部分であろう。

○ 印象に残ったことはたくさんある。真面目で周到、責任感が強く、いつも笑みを絶やさない日本側スタッフや、出会った日本の人たち、明日香村の美しい風景、清潔な街、日本料理のごちそう…こんなに楽しい思いをしたことは久しくなかった。でも、一番印象に残ったことは、やはり細部に現れた調和の魅力である。

東京に着いたばかりの時、私たちが乗っているバスの傍らを1台の救急車が通った。バスは音に反応し、停止した。すべての車が自発的に左側に移動し、道を譲った。これを見て、すぐに私はこの国に好感を持った。道路は狭いが渋滞していないし、クラクションを鳴らす者もない。日本の寺院の木造建造物は、一定期間が経つと完全に分解して検査修理を行う。作業量は膨大であるが、市民と政府の文化財保護の意識はともに非常に高い。緑化対策も適切に行われている。

今回の訪問では、法政大学と天理大学の二つの大学を訪れた。それぞれが独自の特色を持っていた。法政大学の学生は、とてもユーモアがあって、話が上手だった。私たちの日本語がそれほど上手でなくても、漢字を書く等の方法で交流すれば、日本の大学教育や生活について理解を深めることができた。天理大学では、雅楽部の学生たち日本の古典楽器の演奏の仕方を教えてくれた。私は、中国の古典民間楽器の二胡を学んでいるので、日本の民間楽器にも興味がある。今回の交流で、たくさんの知識を得ることができた。

ごみ処理場は、東京での最終日の重要な見学先だった。私は、環境保全問題に以前からずっと興味を持っている。すべての工程の説明を聞き、日本のごみ分別の入念さや、処理工程の厳密さ、効果の高さにたいへん感心した。もし中国にもこのようなごみ処理システムと環境保全の意識があれば、毎日この手に青空を抱きしめることも、もはや夢でなくなるだろう。

来日前、日本側は私たち一人一人の食物禁忌の有無を問い合わせてきた。しかし、思ってもみなか

った。すべての食事において、食物アレルギーのある少数の学生のために個別の定食が用意しており、それが同じように盛りだくさんの食事であるとは。帰国後は、この旅で発見したすべてのことを家族やクラスメイトと共有したい。今回のような旅は、おそらく一生に1度だけだろう。一期一会。しかし、楽しい記憶はいつまでも貴重なものとして、あり続けるのだ。

○ 今回の旅では、収穫がたくさんあった。日本人の普遍的な国民性を知ることができたばかりでなく、自分を完全に日本の文化や商業環境の中に融け込ませて、思考を転換することができた。あたかも「廬山の中に立てば、廬山の心が分かる」ように、深い理解を得た。自分の目で見たり、身を以て体験したりしない限り、奥深いところまで知ることができないこともある。

今回の訪問で、一番もう1回体験したいこと、一番印象深かったことは、ホームステイだと言わざるを得ない。100人余りの学生がグループに分かれ、職業や条件の異なる家に泊まったのだが、意外なことに、ホームステイ終了後に互いの体験を報告し合った時の感想は、日本人たちは温かく誠実で、暮らしや仕事に対する姿勢は慎重かつ向上心がある、民族性が濃い等、期せずして一致した。この点、中国の人々に欠けているものがまだたくさんある。個人的に、またホームステイに行き、もっとたくさん交流し、より多くのことを知りたい。そして一晩でなくもっと長く泊まりたい。

それから、娯楽体験として一番良かったのは、温泉と日本式宴会だ。皆が浴衣を着て畳に座り、食べるのが惜しいほど手が込んでいて、盛り付けを乱すのがもったいないような日本料理を体験した。そして露天風呂で身心をリラックスさせると、にわかに、私たちはより良い生活のために何をすべきなのだろう、遠大な未来のためにさらに何を勝ち取るべきだろうかと思った。

来たかいがあった。また必ず来る。